

インタビュー

# ゼネコン女性技術者から見た、 「女性が活躍できる建築業界」

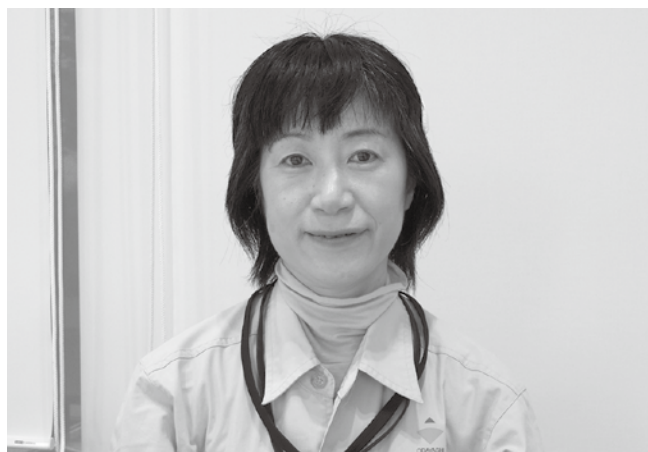
(株)大林組 技術研究所 生産技術研究部 主任研究員

奥田 章子 氏に聞く

社会においても、産業界においても、「女性であることによる不利や不遇」をなくすための動きが広まっているが、建築業界を見渡すと、まだ「男性社会」であることには変わりがなく、女性が男性と同じ水準の環境で働けるようになるには、さらなる改革が必要だろう。しかし、以前とは状況が大きく変化しているのも確かなことだ。

そこで、総合建設会社（ゼネコン）において技術者として従事している、(株)大林組の奥田章子氏に、女性が働く場としての建築業界の現状や、以前と比較して変化した点、自社における改善の取り組みなどについて話を聞きした。

(編集部)



## 残念なことの多かった入社当時

——奥田さんが会社に入られてから今までに、仕事をする上で「女性」であるために苦労されたことはありますか。あったとすれば、それはいつ頃、こういった場面で感じられたことでしょうか。

私が入社した頃は、女性が代表電話を取り、お茶出しをするのが当たり前、といった雰囲気でした。当時は残念な事に、メーカー様との打ち合わせにおいても、そのような発言が実際にありました。現場調査や打ち合わせに出ても、当時は女性技術者が少なかったため、先方も若干驚いた様子で、上司がその都度「技術の〇〇が担当します」と説明していました。それもあって、「任された業務内容を確実にこなす。期待を裏切らない」という責任感・緊張感を持って業務に臨んだことを覚えています。ただ、今はもう違いますよね。全ての人に対して差別や偏見のない、本来あるべき姿に業界全体が変わりつつあります。

また、昔は女性が現場に出る機会が少なかったせいか、工事事務所に更衣室がなく、突っ張り棒とカーテンで仕切られた空間や会議室で着替えることが結構ありました。今はすっかり改善されて、性別に関係なく、清潔感の

ある綺麗な更衣室やトイレの設置が常識になりました。

当時、男性が女性に代わって子育てを仕事より優先する、という雰囲気はありませんでした。そのため、子育て中の女性は保育園に子供を迎えに行かなければならず、残業は出来ない、遠方や宿泊出張には行きにくい、懇親会や催しものになかなか参加できない、という状況でした。そうしたことから、やる気がない、責任のある仕事を任せられない、協調性がないとのレッテルを貼られるようなこともありました。また、社内外・業界でのネットワークが広げられない、社内・業界関係者との距離がなかなか縮まらない、そのために気軽に相談できる方が少ないなどの状況を感じたこともありました。私は10年前、日本建築仕上学会・女性ネットワークの会の立ち上げにも協力しましたが、それには、こういった背景もあったのです。現在は当然の権利として、男性も子育てを優先して休みを取ったり、早く帰宅したり、パートナーの仕事を優先したり出来るようになりましたよね。上司の世代も変わったので、「女性は内(家)で子育て・家事、男性は外で働く」といった固定観念が消え、何事に対しても差別なく平等に考えることが出来るようになってきたと思います。

先日、タレントの石原さとみさんがインタビューで「子育てってこんなに大変なんだって思いました」と、実感の